



大貫 昭彦

# 歴史ロマン・オンライン鎌倉 3 「たそがれの鎌倉」

2020年5月17日



## 先週の鎌倉

先週 11 日の鎌倉の風景です。大仏さんの前はバリケード、お断りの札、小町通は人出なし。お昼ごろの風景です。若宮大路の二の鳥居の写真は午後 4 時頃。寺も店もほとんどが締まって、閑散としています。3 月末のオープンに間に合わせるように頑張っていた、駅前のメトロポリタンホテルは、なんと意地悪な時期にぶつかったのでしょうか。お気の毒に。それでも待ちきれないのでしょう、あるいは「やけのやん八」？テナントの「無印良品」は開いています。

## 鎌倉のたそがれ

こちらも、何となく自粛して、世間に憚ってなじみの居酒屋には足が向きません。おかげで家で飲む量は健康的です。それにしてもこんな寂しい鎌倉は、自分の経験では初めてです。

天災に加えて人災の多かった鎌倉ですから、長い目では何度かあったでしょうね。まず思い当たるのは、1333年の幕府滅亡です。「太平記」は攻守数十万が市街戦を演じたと記していますが、まとめは「平家九代ノ繁昌一時二滅亡シテ、源氏多年ノ蟄懐一朝二開ル事ヲ得タリ」と、町の荒廃には言及していません。

## 公方なき鎌倉

鎌倉の衰退は、それから百年後の足利公方滅亡のときです。1429年、京都と鎌倉の足利氏が激突し、鎌倉公方持氏は討たれ、後継者の成氏は古河に追われてしまいます。この時町は火の海となったのです。永享・享徳の乱です。

…軍兵乱れ入りて御所に火をかけ、雲霞と焼き上げたり。吹迷ふ風に従ひ、焰四方に飛び散り、小路々に燃えかかり、同時に焼け上りしかば、煙に咽び焰に迷うて、老たる人幼き人、子供女童の泣き叫ぶ声、上は非相の峰にも聞えつべく、焼け崩れ燃え倒るゝ響きは、下、風輪の底までも徹りやすらんと夥し。人馬に踏殺され、猛火に焼け爛れて、死するもの数を知らず（鎌倉公方九代記）

…御所を初として谷七郷の神社仏閣追捕して悉く焼払。頼朝卿已後北条九代の繁昌は元弘の乱に滅亡し、尊氏卿より成氏の御代に至て、六代の相続の財宝、この時皆焼亡して永代鎌倉亡所となりて田畠あれはてける（鎌倉大草紙）

## 大仏も博打場

永享の乱から半世紀、近江出身の禅僧万里集九、太田道灌の招きを受けて江戸に旅します。途中鎌倉に寄った折、詩文集「梅花無尽蔵」に当時の様子を書き留めています。

…銅大仏に逢ふ。長七、八丈、腸中、空洞にして、数百人を容るに応ず。背後に穴あり。鞋を脱いで腹に入る。みな云ふ。「この中に往々博奕の者、白昼五白を呼ぶの所なり（梅花無尽蔵）  
\*五白一表裏白と黒に塗り分けた板を使う博打

## 江戸前期 - 沢庵の鎌倉

江戸前期、京都、江戸で活躍した禅僧の沢庵和尚も衰退した鎌倉を訪れています。

…仏光（円覚寺開山無学祖元）の塔を出て第四山浄智寺に入てみれば、三間四面の堂一字にふるき仏を安置して、いづくを開山塔というべき様もなく、末土辺土の僧一人来たりてかずかず茅屋ちいさくいとなみかたはらにあり。其次に又一僧一字をかまへたり。仏殿の本尊もやぶれしづれてこもといふ物につつみてありしを、我らみづから負もちきたりて膠付などして、わびつつも立置ぬとかたりける。あさましきありさまなり。天下の五嶽などかくのごとく成はてぬる事やあると嘆息やみがたし（鎌倉巡礼記）

## 江戸末期 - 菅茶山の鎌倉

備後広島島の漢詩人菅茶山は、200年前鎌倉を訪ねました。

「鎌倉」  
荒墟にも 壊道にも 艸は 萋々として  
将第も 侯家も 處々に 迷ふ  
行 舊聞を憶ひつつ 遺址を 尋ねたれば  
山茶の花は 落ちてあり 古の僧栖に



昼時の小町通（→次ページ鎌倉の様子）



5月11日 鎌倉風景



昼時の小町通



閑散とした鎌倉駅



若宮大路二の鳥居



長谷大仏門前のバリケード